

会 議 録

1 会議名

平成 29 年度第 8 回春日区地域協議会

2 議題（公開・非公開の別）

(1) 報告事項（公開）

① 委員の欠員について

(2) 研修等「春日山城跡の保存と活用について」（公開）

講師：小島幸雄 氏（新潟県文化財保護指導委員）

(3) 自主的審議について（公開）

① 分科会メンバーの役割分担について

3 開催日時

平成 29 年 9 月 14 日（木）午後 6 時から午後 8 時 10 分まで

4 開催場所

上越市市民プラザ 第 4 会議室

5 傍聴人の数

3 人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委 員：今井 孝、太田一巳、大竹明德（副会長）、金子隆一、佐藤美奈子

渋谷 俊（副会長）、田沢 浩、谷 健一、新野武宣、野澤武憲、橋本桂子

藤田晴子、星野 剛、吉田幸造（会長）吉田 実、鷺澤和省（欠席 3 人）

・事務局：中部まちづくりセンター 山田センター長、野口係長、田中主事

8 発言の内容（要旨）

【野口係長】

・会議の開会を宣言

・上越市地域自治区の設置に関する条例第 8 条第 2 項の規定により、委員の半数以上の出席を確認、成立を報告

・上越市地域自治区の設置に関する条例第 8 条第 1 項の規定により、会長が議長を務め

ることを報告

【吉田会長】

- ・会議録の確認：鷺澤委員に依頼
議題「(1) 報告事項」の「①委員の欠員について」事務局に報告を求める。

【山田センター長】

9月5日に当協議会委員の加藤幸吉様がお亡くなりになられた。第3期協議会委員としては1年4か月という短い期間でしたが、加藤委員を偲び黙祷を捧げたいと思うので、その場にご起立いただきご協力願います。

— 黙とう —

なお、後任の委員は条例に基づき、改めて公募はせずに区内の委員資格者の中から市長が任命することとなっている。現在、市で調整しているところであるのでご承知おきいただきたい。

【吉田会長】

次に「(2) 研修『春日山城跡の保存と活用について』」事務局に説明を求める。

【野口係長】

春日区地域協議会では、昨年10月に春日山城跡の重要遺構群を視察し、理解を深めてきた。また、自主的審議事項においても、分科会で「春日山城跡の観光振興策」を審議することに決まった。

本日は、新潟県文化財指導委員の小島幸雄さんから講演いただき、後半で質疑応答を行う。また、春日山城跡の保存整備などにもご尽力いただいている3つの関係団体の皆さんにもご参加いただいております、感謝申し上げます。

それでは、小島さんから講演をお願いします。

【小島幸雄講師】

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました小島です。お顔を拝見しますと、お知り合いの方のほうが多いと思うくらい、いつもお世話になっている方ばかり。今日は45分という短い時間ですので、短刀直入にお話しをさせていただきたいと思います。

私は昭和52年に富山市にいたところ、上越市に来ないかということで来たわけです。最初は上越教育大学の発掘をやっていましたが、当時の清水教育長が「お前を呼んだのは、大学用地だけではない。本当の目的は春日山なんだよ。」ということを知った。それ以来40年間、春日山とずっと付き合わせていただいているので、春日地区の皆さん

んとも必然とご一緒する機会が多くなる、こういうことです。

短い時間ですので、どんどん進めますが、文化財は皆さん、意外と堅苦しいもので、中々取っ付きにくいというふうにお思いかもしれませんが、そもそも文化財は私どもが生きてきた証なので、そんなに堅苦しいものではありません。ただ、国の文化財ということになると、多少枠が固くなるというのは、否めない事実であります。

文化財の保護制度は明治4年、明治維新になってすぐに始まります。どうしてかという、明治維新で諸外国が入ってきて、どんどん文化財が流出する。それを止めるために文化財保護というのが始まるわけです。その中でも大きくは、国宝保存法とか古社寺保存法です。これは、社寺仏閣を保存するということなのですが、その後に史蹟名勝天然記念物保存法というのが出てくる。この史蹟名勝天然記念物保存法というの、春日山が含まれている文化財のカテゴリーということであります。

今、全国で1,600余りの史跡があるといわれていますが、春日山と上越一円でいえば長者ヶ原など全部で10か所くらいある。天然記念物にしても数か所あるのですが、上越市内でいうと1,400か所くらいある遺跡のうち、国の史跡になっているのは、春日山と宮口・水島古墳群と吹上と窯蓋かまぶたの5つしかないわけです。そういう非常に少ない中でやっていますから、当然価値も高くなるということです。

文化財保護制度をずっと辿っていくと、昭和25年に議員立法で文化財保護法がつくられた。中心になったのは山本有三ゆうぞうという作家ですね。その方が中心になって「文化財を守っていきましょう」と。

国が動いていくときに文化財をどんどん壊してきているのです。その壊してきたときに「これじゃいけないね」ということで、文化財保護法が改正された。私は、昭和50年に大学を出ているのですが、ちょうどその年が文化財保護法の第二次改正の年です。その25年間は高度経済成長期です。高度経済成長で遺跡、文化財をボンボン壊してきた。その証として「もうこれ以上は…」というところでガードをかけたということですね。

その次の大改正が平成12年です。これは、地方分権のときですね。文化財保護法が平成12年に変わったときに、面白い条文が出たんですね。それは、「文化財史蹟名勝天然記念物の現状変更の許可の一部を市に移管する」という条文が載るのです。私は市の職員で、同業者が全国にたくさんいますよね。その同業者の1人が「これで、俺たちも国の史跡を現状変更して活用できる」と思った人間がいたのです。文化財保護法

の施行令というものがあって、その施行令の中には「これしかできないよ」と書いてある。やっぱり文化財保護法という、国が国の宝物として認めたもの、指定したものの。それにはやはり国のガードというものがあるのです。でも、一番大事なものは文化財を守っても“そのままにしておいたら何もならない”ということですよ。私は、行政にいたものですから、堅苦しい話をするかもしれませんが、そもそも「文化財を守るということは文化財を使うということ」だと思っているのです。それが、40数年間、文化財に関わってきた、私の今の結論です。

「その使い方というのは何か」というのは、色々あると思う。平成元年に「国の史跡をどんどん使いましょう」というふうに、国の方針が転換されたんですよ。その時に、国は「史跡を観光として使う」というふうなことを、頭の中にチラチラしていたみたいなのです。でも、私は「史跡というのは地元の人たちのために使うべきだ」という考えを持っていたんですね。国のヒアリングがあったときに、文化庁の記念物課という、お偉い方がずらっと並んでいるところで、その意見を話したことがあるのですが、全く評価はされませんでした。今となっては、文化財の基本的な考え方は、当時の私の考え方と似ていますね。

文化財は地元の人が「どうやって大切に思うか、地元の人が宝物と思うか」。それも「国として史跡としながら、それをどう使っていくか」。「地元の人たちに、どのようなものとして還元できるか」というのが、今の基本的な文化財の考え方です。冒頭、申し上げましたように、平成12年の法改正にしても、文化財は基本的には守っていかなければいけない。何でもしてよいわけではない。どこまで議論するのは最終的には国に聴けばよいのですが、史跡を持つ行政・地元の皆さんから「観光はどうか、この土地はどう使ったらよいのか…」の議論をいろいろな面ですべきだと思っているのです。

史跡には小さなものがあります。一番小さな史跡は5坪くらいです。何かというと、奈良時代の聖武天皇が建てた国分寺の塔の土台の石が1個だけ残っている場合もあるわけです。それを史跡として保存するわけです。そんなちっぽけな史跡もあるのですよ。岐阜県の高山市にある飛騨の国分寺。今度行かれたときに見てあげてください。国分寺の境内に石だけあります。その石だけが囲まれているのです。

そういう史跡もありますが、本来的に史跡は土地でしょ。春日山はあれだけ面積を持っているのですよ。単純に春日山を四角と見ると2キロメートル四方、4平方キロメ

一トールあるのですよ。その史跡の広さをもってすれば、文化財だけで守っていくなんて不可能です。それをどうやって使えばよいのか。

若い時に、春日山に登った際に、高校生が虫網を持ってジーンと待っているのので「君、何しているの」と聞いたら、「オオムラサキを待っている」と言うのです。「国蝶でしょ」と聞いたら「そうです。春日山にいと聞きました」と言うのです。私、40年春日山にいますけれども、こんな風に私の知らないことなんて、山ほどありますね。

土地が広いということは、使い方にバリエーションがすごくあるということだと思います。文化財として指定されているのは事実。だから文化財として残せばよい。でも、その使い方というのは文化財に限らない。その知恵を皆で出し合うのが、文化財保護であり活用なのです。演題に「春日山城跡の保存と活用」とありますが、保存というのは基本的に行政にしかできないことなのだと思います。これは行政がどんどんやっていけばよい。それをやっていくのが行政だと思うけれども、その活用となると、私も行政にいたけれども、行政の人はガードを緩めると歯止めが利かなくなるから、「条例に書いてある」とか「法律に書いてあるでしょ」と。そうするのが行政だから仕方ない。でも「行政がこうできる」というところを皆で考えれば、その史跡の使い方というのはもっと広がってくると思う。これが私の考え方です。市役所を辞めたとは言え、元々行政にいたのですから、決していい加減なこととは言えません。これは、そんなことを言ったら自分の今までやってきたことを全部否定してしまうので、そんなことは絶対に言えませんが、「活用が全てだ」というのが、若いころからの基本的な私の理念です。

今は指定地だけで約60ヘクタールもあるのですよ。これほどの土地を上越市は持っているのです。この指定地にたどり着くような道、そこから出ていくような道、そういったものもある。これは行政がなかなか及ばないところなの。そういったものをどうするのか、そういう色々な考え方を使い、駆使して、知恵を出し合えば私は春日山の土地が生きてくると、ずっとそう思っています。

春日山は凄いいと思いますね。全国の史跡であれだけの人が毎日のように訪れている史跡はないんですよ。私も職業柄全国を歩かせてもらいましたが、春日山は、ただ行って帰ってくるだけかもしれないけど本当に人が来る。そこをどうするかはこれからの話なのでしょうけどね。史跡に人がいないなんていうのは日常茶飯事です。史跡なんて誰もいないことが多いです。それなのに、春日山って、あれだけの人が来るじ

やないですか。なんで来るのか。上杉謙信公でしょ。謙信公をどうやって売っていくか。

私は、ある本にコメントを書いたことがあるのですが、ガクトさんが来たじゃないですか。ああいうストイックな、人をギュッと引きつける、それが謙信公だと思うのですね。だから、ああいう人を見ていると意外と好きなんですね。ただ、私はあまり人間が集まる場所が好きではないので、祭りにはあまり行きたくはないのですがね。ああいう祭りも、どうやって続けられるかということだと思うのです。人を呼ぶのもガクトさんだけに頼ってはいけないと思いますけどね。そういう「謙信公って何」という部分をどんどん出していく。春日山に来た人によく聞くのですが、「謙信公に会いに来た。」という人が多いんですよ。春日山を見にきたのではなく、謙信公に会いに来たという人がいるくらい、それくらい謙信公と春日山は、くっついたイメージのようですね。

さて、ここに、今流行りのパワーポイントなるものがあります。非常に不得手なのです。これをやると自分の話がわからなくなります。喋っている方が得意なんですけど、ちょっと活動の一端を映像じゃないとわからない部分もあるので、ちょっと使わせてください。

— パワーポイントを使いながら説明 —

なかなか、こういう景色はないですね。春日山は今日も真っ赤でしたけどね、これはなかなかのものですよ。こういう写真を撮りたいと思いますが、どこから撮ったらよいのかとかね。昔は撮りやすかったけど、今は家がたくさんあるので、撮りづらい。高いビルもありますしね。

これが、一番古い絵図です。元禄7年。これが、天保7年くらい。春日山神社さんにある、黒田好廣さんが書いた天保7年のいうものによく似ているので同じ時代でしょう。

これは幕末ですね。これは、大豆の森本さんのお宅にあったもので、明治11年の明治天皇の北陸行幸の時にご覧いただいたものです。これらを一覧にまとめるとこうなるのです。元禄7年はああいう絵図だったのが、屋敷をきちんと描いて、名前を書いている。それが幕末になると、こういうふうにお城を構えて城下町になる。

明治11年になると、金々キラキラになる。これが上杉謙信の評価です。元禄、江戸時代の中ごろは上杉謙信はそんなに評価されていないようですね。それが天保7年より後になると、こうなるのですよ。だからお城の絵図なんて書かない。幕末になるとす

ごく重要な方になってくる。軍神になるわけです。その後、明治天皇に見せるということは、ご先祖は大変重要な家臣だったということを示している。こういうふうに謙信公の評価が上がってくる。これが、春日山が史跡になっていった原動力です。

これは平成版です。これはなかなか良いパンフレットで、歩きやすいと思います。

これは、さきほど申し上げたように史跡になっていく履歴です。大正8年に史蹟名勝天然記念物保存法、大正3年に有志による春日山保存会設立。これは大正天皇の即位記念です。大正15年で謙信公祭です。昭和10年に史跡になった。ここら辺は大河ドラマのときに、あの春日山入口から春日山神社につながる道路ができた。私が2番目に仕えた課長は内藤さんでした。内藤さんは昭和43年まで社会教育係長をされて、44年に観光課係長でした。「あの道は俺が造ったんだ」と教えてくれました。あの道がないと、下からずっと歩くので、内藤さんに感謝したほうがよいのかどうかはわかりませんが。春日山の全体的な保存となると、あの道はどうかと私は思います。それから、ずっときて平成12年に追加してこういうふう^{そうがまえ}に総構を造った。

これは、昭和48年当時の、今の“ものがたり館”の近くですね。春日山で一番大事なものは、一番てっぺんの本丸からものがたり館までが全部お城だったということ。これは全国に1か所しかありません。私が行った限り、山のてっぺんから、裾^{すそ}を囲っているという山城はないです。石田光成の裾を囲っているお城はあります。でも途中がないのです。途中は単なる山。上にお城があって、下に土塁がある。石田光成のお城も、七尾城もそうだし、どこも一緒ですよ、だから春日山城は凄いの。

これが、今見る総構ですね。土塁もちょこちょこっと曲がっているでしょ。上空から見るとこういうふうに曲がっているのですが、こういうふうに曲げているのは新しい時代です。なぜ、総構が埋蔵文化財センターと、ものがたり館で違うかということ、御館川です。御館川の流れているところの南側と北側というのは、できる時代が違います。おそらくこっちの方が新しくできているのだと私は思っています。

ここをいつ頃からか、謙信公祭で使うわけですね。最初のころは、ここでやってよいのかどうかと随分と議論したものです。謙信公祭で人がワッと来るようなお祭りを、こういう所でやってよいのかどうかという議論もあったことは事実です。私はちょくちょく使えという主義ですが。私が今お世話になっているのは、新幹線の上越妙高駅前の釜蓋遺跡です。あそこはビール祭り（オクトーバーフェスト）まで始めましたが、あれはちょっとね。ビール祭りそのものはよいのですが、人が集まり過ぎちゃ

って、毎年芝生が傷んでしまうんです。そうすると毎年それを修復しなければいけないのが苦痛ですけど、これも遺跡として使ってよいのかなというふうに思いますね。

これは平成7年から整備した大手道です。

上越教育大学の創立20周年と上越市でフォーラムをやりましたね。当時の宮越市長が「春日山は上杉の城だから杉を植え過ぎた」とダジャレを言っていました。その頃から杉を切り始めます。このフォーラムというのは、そういう意味では春日山にとってももの凄く大きい転機だったと思う。

これが大正初期の春日山の写真です。こういった雰囲気に戻すことです。お城というのは、そもそも木が生えているはずはないのですよ。木が鬱蒼^{うっそう}としているところにお城があったら、敵がどこから入ってきても分からないからツルツルにしておくものです。ツルツルにしておく絶対人なんて上がってこないです。木を植えたらどうなるかという、火をつければ上昇気流でパアッと一度に燃えるでしょ。そんなふうにお城を造るわけがないんです。お城は丸ハゲだというふうに私は思いますね。

杉を切りました。切っただけでは嫌なので、埋蔵文化財センターの柵にも使いました。もっと用途はあったのかもしれないけど、その時はこのくらいしか頭が回らなかったですね。これが杉を切る前と後の写真です。これ程違うのですよ。あれは三ノ丸の杉ですが、こんなふうに残しておいたら、絶対にお城が見えなくなってくるし、お城だったかどうかさえ分からなくなってくると思いますね。

皆さん、地元だからご覧にならないかもしれないけど、上越インターチェンジから北陸自動車道に乗って富山方面へ向かうと「春日山城址」という看板があるのをご存じですか。ただの緑の山、緑の草の集積場みたいなやつが“春日山”というふうに表現されている。それを早く、お城の形にしてもらいたいというのが私の願いです。

これが、杉の伐採をしたときに撮ったものです。平成28年3月31日、去年の終わり。

土の一袋運動も私どもが考えた。最初は、どうせ使えなくなるだろうから安いレジ袋で土を持って行ってもらえばよいと思った。だけど、レジ袋って結局ゴミになり、春日山にそれを捨てられると困るので、この布袋を持って帰ってもらう。これを家に持って帰って洗ってもらえば、靴入れくらいにはなるでしょうということで、これを作りました。

昔、会計検査院がきて、調査官が検査をしていたのですが、どうしても春日山に行き検査をしたいということで現地検査をやると言ったのですが、これを両手に持って

上がって、その袋を持って嬉しそうに東京へ帰って行かれました。この袋は結構持って歩いている人が多いですね。これは自分がやった仕事の中では結構うけているかなと思っています。

それから、本丸の修復は、地元の小・中学生がやっています。それから今日もお出でいただいている地元の関係団体の方から、絶大なご協力をいただいていると教育委員会から聞いています。これが本来のやり方なのだろうとずっと思ってきたのです。

春日山というのは、私が昭和52年に来た頃は、鬱蒼として真っ暗でした。汗をかきかき春日山へ登って頂上へ行くとスーッとして本当に涼しかった。それは西の愛宕谷のほうからの風で、郷津から冷たい風が上がってきます。ですからどこも涼しかったです。それが次第にだんだんハゲ山になってきたものだから、雨が降ると、どんどん土が流れるのですよ。ここにはよく映っていませんが、「春日山城址」という大理石の石碑があるでしょ。あの土台が全部浮いて出てくる。それは、あれだけ下がったということですよ。下手すると数十センチメートル下がっているかもしれない。

これは、昭和53年3月に私が市役所の屋上から撮った写真で、向かって左側が春日山です。当時はカラーがなかったわけではないと思うのですが、私は何を思ったのか、白黒で撮っているのですね。別に時代感を出すために撮ったわけではないのだけでも。

これが、平成27年に同じ場所から撮った写真ですが、春日山は全然見えません。先ほどの私が撮ったときにはガス水道局もありませんでしたから、市役所があって、信越本線があって、田んぼがあって、大豆の集落が見えて、春日山が見える。あとは何もなかったのです。そういう写真をずっと撮り続けてきています。

これは冊子「直江の津・39号」ですね。私が「春日山城で越後府中 平成28年7月27日の春日山」というエッセイを書いています。40年の中で一番悲しい日は、この日です。山が大雨で崩れちゃったと思ったのです。正直言うと、私自身もやっちゃったと。ここが柔らかいということはずっと知っていました。ここが一番早くフキノトウが出てくる土地だということも分かっています。それだけ水が多いからです。地下水が多いので崩れるならここだろうと思っていましたが、さすがに寂しかったですね。40年間の俺は何だったのだろうと。正直なところ、この日を境に「何で崩れたのだ」ということを、もう一回考えました。結論からいうと、本当は屋敷が崩れていなかったというのはわかったのですけどね、後から。

これが平成27年4月と平成28年7月の違いです。まだ残っていた杉が、どんどん無く

なって、少しずつ雑木も切っていただいています。市長も、新潟大学の防災センターも、文化庁の方もすぐ見に来てくれました。何で崩れたのかが分からないと、後の処置ができないので、実は発掘を試みたのです。発掘をしたときに、28年前にはあれだけ杉があったのですね。それで頭が軽くなっていたのですが、今まではほとんど起きていないのですね。よくよく見たら、これがメカニズムなのです。真ん中に黒っぽい直角三角形みたいなものがありますが、赤い三角形の左側に出ているところが400年間かけて上からドロドロと落ちてきていた。そして上のL字型になっている三角形の所は^{えぐ}抉れていますね。抉れているところは、そもそも落ちていたところなのです。春日山というのは、山の斜面を削って平らな所を作りますが、平らな所を作ったら土が余りますね。そして次に下を作るときに、その斜面の途中にある所から乗っけるのです。だから上の斜面を削って平らにして、上の斜面から出た土を次の斜面の上に乗せて、自分の陣地を増やすわけです。削ったところをそのままにすると小さい屋敷なのだけど、削った所を増やすことで、屋敷を大きく見せているのです。おそらく3割くらい大きいのです。これから自分で考えているのは、もう少し長生きして春日山が崩れたメカニズムを追って解釈すると、どれくらいの大きさの屋敷がどういうふうに分布するかということをやりたいと今ウズウズしていて、その平面図を作り始めているのです。春日山は我々が考えているものよりも、1つ1つが非常に広がった。真上から見たときに3割くらい増やしていく、その傾斜の変換点を使って書いていくと、今我々が見ているようなダラダラとした斜面ではなくて、もっとグッと迫ってくる。謙信公の銅像の横で見たときに、本当はこんな風に見えたのではないかというのはCGでもできるから、そういったものを作って置いておく。そうすると、崩れたことから我々がどういうふうにして再生したのかという証にもなると思う。もう1つは、これから一番大事なものは水処理なのです。これは市役所の机で仕事をして、たまに春日山に行った人間が見ても分かるものではないと思う。地元の皆さんのほうがずっとよく知っている。そういった知識を行政がもっと吸収して、こんなふうにしたらよいという議論をして、その中でお金のかかるものは行政がするべきです。そして皆で一緒にできるものは、皆でやるというふうに分けるべき。全部が全部、行政ができるものではありません。予算の関係もあるけれども、それだけではないと思う。春日山に関わっていただける皆さんのお気持ちがあって、初めて春日山の広域的な利用ができるのではないかと。

先ほどの話のように、チョウを追いかけている人がいます。そしたら自然の昆虫園

じゃないですか。杉を切っていただいたら、春先に、まるで絨毯^{じゅうたん}を敷いたようにカタクリが咲きますね。そのカタクリが終わった後には、シャガが出てきます。そういうものが年がら年中です。湧水のあるところでは1年中、真冬でもフキノトウが出ていますよ。私の友人で1月1日に春日山にフキノトウを取りに行ったという人もいました。山葵^{わさび}もありますし、根っこから取らなければ多少のことは大丈夫です。根っこから取っちゃだめですよ。

現職の頃に、職員の皆に「春日山に行くときには鎌^{かま}を持って行け」と言って「何するのですか」と聞かれたので「1回一緒に行こう」と。鎌を持って何をしたかという、芋づるをみんな切ったんです。春日山の天敵は人間です。あそこは三紀層の山で、絶壁を削って城を造っていて、その上に400年間腐葉土が溜まって、芋にとってはまことに結構。芋掘りにとってもまことに結構。春日山から芋掘りを絶滅させたら春日山もう400年くらい、しっかり守れるのではないかと思えるくらいです。私が40年前に来たころは、穴だらけの山でしたが、最近は木を切ったりしておりますので、結構そういう面で芋は少なくなってきたような気はします。これで、パワーポイントは終わりですね。

春日山は実際には崩れておりません。400年間ボロボロ崩れた土が、次のところの屋敷の山側と沢に溜まってしまった。その沢に溜まったものが、スポッと抜けてしまった。抜けてしまったものだから、今度は上に乗っかっていたものが、滑ってしまった。春日山は、本当は崩れていなくて、実際には凄いエネルギーを持っている山だったというのがわかりました。私は、春日山の昔の屋敷は復元できないと思う。やったらまた崩れる。今の状態をどう守っていくかが一番大事だと思う。

これからの春日山を考えると一番なのは、水管理です。この水管理をどうしていくかということは、私たちよりも、春日山に精通している地元の人たちのほうがずっとよいのです。そういった知識を知恵に変えて、春日山を400年間崩れないで保ってきたのだから、さらにもう400年間置いてやりましょうよ、というのが私の考えです。

今、国宝謙信公太刀で大変だと思います。ポスターに「400年前に去った刀をここに呼び戻しましょう」と書いてありますが、私もそこが大切なことだと思います。400年前に上杉景勝が持って行けなかったものが、1つだけあるのです。それは春日山です。上杉さんはここから会津に転封になるときに、金銀財宝をすべてお持ちくださいました。きれいさっぱり何1つ残さなかった。1つだけ残していったのが春日山でした。そ

うということからすると、春日山はせっかく残していただいた、謙信公の証だとすれば、地元の皆さん、そして行政も一緒になって残していく方向を探るべきだと思う。

ここになって、資料の話をしなかったですね。春日山をどうゆうふう^に工事をしてきたかを、A3用紙1枚にまとめておきました。この重機はロッククライミングマシンだそうです。これは千葉県から運んできたそうです。オペレーターの方は群馬県の方です。とてもおっかなくて歩けもしないところを、スイスイとワイヤーで引っ張って登っていくのです。こんなこともできるのですね。凄い機械だと思いました。

後ろの4枚の資料は「春日山城跡における今後の保存管理及び活用について」という上越市が作っておりまして、そのダイジェスト版です。せっかく皆さんおいでくださいましたので、お土産にと思いお持ちしました。これは、私が辞めた次の年くらいに策定したものです。第1回目の保存管理は私がまだ20代のころに作ったのですが、それがもう古いということで作り直したのが、皆さんに差し上げたダイジェスト版です。本物は埋蔵文化財センターでぜひご覧いただきたいと思います。時間になりましたので終わりにします。

【野口係長】

講演に引き続き、質疑応答に入る。質疑を求める。

【春日区町内会長協議会】

小島さんは地質学者でないのですが、お聞きしたい。頂上の近くに井戸があるが、どうしてであんな高い所に水が出るのか。その辺の水脈が原因で起きているのかと思うのだが、その辺を知りたい。

【小島講師】

春日山の裏の井戸は、「礫層」の褶曲れき しゅうきよくによって作られている水脈である。そのデータを持っているのは昔の道路公団である。道路公団が北陸自動車道を造るときに、ずっとボーリング捜査をしている。その捜査の結果を見たときに、これだというふう^に思った。ここは元々が隆起地形なので、全て海底から上がってきたものである。海底から上がってきたときに、もちろん石が入っている層も一緒になって盛り上がってくる。この周辺でそれが一番よく見えるのは郷津海岸である。現在地に移動する前の居多神社があったずっと東側から沈み込んでいく礫層と、郷津から東向きに沈み込んでいく礫層がある。その礫層と同じ層が春日山にもあると理解していただいて構わないと思う。春日山の水脈はおそらく薬師からで、テレビ塔の西側の山の岩殿山から

ずっと続いているところである。あの山に降った雨が一旦下がって、サイフォンの原理で押し上げられて春日山にきていて、それからもう1回下がる。今の関川の所だと、地上から40メートル下に春日山にある礫層と同じ地層があるそうである。だからいつもフレッシュな状態であり、吹き上がることはない。

仰ったように、あの水が山城を造ったときに、どこかどこかでカットされているらしい。それが三紀層のクラックに回り込んで、崩れるのが一番怖い。今回はそこまではなかった。今年7月1日の大雨の次の日に斜面を見に行ったが、結構水が噴き出していた。その水の関係はこれからの春日山の全てである。いいご質問に感謝する。

【橋本委員】

1つ目は、地元の水に詳しい人に、詳しい方に頼るとよいと仰っていたが、地元の水に詳しい方はいらっしゃるのか。

2つ目は、今日配布された「フィールドミュージアム構想」の地図で“眺望ゾーン”とあるが、行ったら何も見えなくなっている。インターネットで見ると、「春日山は残念な観光地だ」という書き込みが最近あるのだが、何とかならないのか。

【小島講師】

駐車場から街を見たときか、あるいは山側を見たときのどちらか。

【橋本委員】

案内版の前に立ったときに、木が育ちすぎて、眺望案内版が何の意味もないということである。

【小島講師】

木は成長すると言いつけているが、杉はある程度の所まで成長し続ける。成長続けるが、当初春日山の木を掃除しようと取り組んだ方々と「なるべく木は伐らないように」と話をしていた。だが、木は伐らないと管理が必要である。伐らなければよいというものではないのだが、教育委員会は誤解している面がある。木を残したら、管理をしないと、どんどん大きくなる。一番残念なのは、私は駐車場に車を停めて、よく夜景を見に行くのだが、とても綺麗なのだが、見えるところがほんの少ししかない。そういうものを管理すべきだと思う。今、実験するように指示しているのは、どこで伐ったらヒコバエがどういうふうに出てくるか。木を下から伐ってしまったら出てこられないので、針葉樹にヒコバエは出てこないが、紅葉はどの芽を残したら次の芽がでてくるのかなど、常々勉強している。“残すということは管理すること”である。

文化財で残したら管理が必要であり、管理しているだけでは何の価値もないので、それをどう使っていくかが知恵である。今、春日山に関わらせていただいているのは、そのためである。せっかく残したのに、そのままにしておいても面白くないので使いたい。そこに集ってきた方とお話するのが大切である。もっと伐るべきだと思う。

管理しなければ土は流れる。付け加えると、雑木を残して大きくすると、雑木は枝ぶりが良いので、冬になると重い。重いから木が寝るので、すると根っこが起きてきてそこにクラックが生じて、そこに水が入ってくる。それが一番怖い。雑木を残したら、管理をしなければならない。それがこれからの課題である。

水に詳しい方だが、それは誰という意味ではなく、そちらに地元の方が揃っていますので、そういう方のほうがよく知っている。雨は必ず降ってくるが、ゲリラ豪雨はどうにもならない。山形の山寺の階段は狭くて、ものすごくたくさんあるのだが、何段かに1か所で水を斜面に逃している。逃すと鉄砲水になり、サッと出てくる。鉄砲水が出るところに、土台でいっぱいいろいろ置いておくと、鉄砲水が散る。そうすると割れないのである。そういうのを皆で見て勉強すればよいと思う。どなたということではない。

【蟹沢を愛する会】

私は春日山から出てくるよい水で「こしひかり」を作っている。資料の史跡の計画の中に第2期は平成19年から20年までとあるが、第3期はいつから始まっているのか。

【小島講師】

第1期の保存計画を作ったのが昭和55年で、第2期の計画を作ったのが平成21年。今は第2期に当たり、第3期には入っていない。

【蟹沢を愛する会】

地元の皆さんから春日山の土地の公有化の問題が出ていて、公有化の問題についての考えがあったらお願いしたい。

【小島講師】

現職ではないので、春日山の土地の公有化について、ここで意見を言うことは控えさせていただく。公有化については私もずっとやってきたが、春日山を守るためにはどこまで追加をするのか。追加した所は買わなければいけないのは事実なので、現在の担当者にお尻を叩いて進めるように努力したいと思う。

【金子委員】

崩落部分の修繕は終わったようだが、今後この場所はどのように対応していけばよいのか教えて欲しい。

【小島講師】

現在のままで残すには、傾斜がきつ過ぎる。かといって、全部に鉄筋を打ち込んで、国道沿いの崖のような修理をしてしまうと、未来永劫、緑が戻らないので、その中間で今補強を施工している。今見ている赤い土の部分を3つか4つの方法で分けている。斜面によって、自然に流れる傾斜角、それから絶対に流れない傾斜角、それからその中間というふうに分けている。一番厳しい所は、パネルで留めないとダメである。普通の国道だったらコンクリートの枠のままとするが、春日山城の場合パネルで留めた部分に、そこに吹き付け材を乗せ、そこに種を入れておいて、種子は発芽環境を整えば芽を出せる。斜面を緑にして草を垂らすと、草の上を水が流るので、草の根には水が回らない。そういう所を作っておいて、自然に次の木が生えてくるのを待つ。ただし、そんな急な斜面に木を植えたら駄目なので、木を植える所は下のほう、そして斜面は草を生やす所というふうに分けるようにしている。管理ができないのは絶壁で、この写真の重機が乗っている所くらいまではよいのだが、オーバーハングしている所もあるので、そういう所は草だけ垂らすというふうになっている。

【越後青芋の会】

春日山城の正面からは、よくわかっているが裏のほうにもある。それだけ大きい城だと思うが、それが世の中に出ていないので、裏から登る道が汚く悪い。整備されていない昔の古道がある。こういったものをきちんと市として整備する予定は今後あるのか。

【小島講師】

行政の予定を申し上げることはできないので、別の機会に行政でやっていただければと思う。裏の部分はとても大切だと認識している。江戸時代に既に裏のほうに着目した人がいた。頸城鉄道の山田社長が持っていた絵図の中にあっただが、火事になったので今はないと思う。春日山の裏に着目した絵図はその1枚だけだった。裏がなければ山城は存在しない。山城は籠城するだけの城ではない。どこからでも攻めてこられるし、どこからでも逃げられる、それが山城の良いところである。だから、山城は後ろに的確な道路がある。

七尾城を謙信公が攻めて、七尾城が落ちてしまったが、なぜかという、回りの道

の全てに上杉軍を配置したからである。それで、取った所が全部お寺と神社だった。「石動山」など全部取っておいて、そこで出てこられないように、ずっと待っていた。

鳥瞰図を書くときは、山城は角度を少し上から見た鳥瞰図がよい。今ある春日山の絵図は、昭和44年に「天と地」をやった時に当時の高田市の広報の職員が描いた絵図だそうである。あれを上手に発展して裏を描けたらと思う。それはご意見をいただいて、議論する材料にさせていただく。

【春日山城跡保存整備促進協議会】

私は、今まで小島さんは文化庁と同じ考えだと勘違いしていたが、今日お聞きしたらよいことを言われていた。活用をどうするかということが一番大切で、地域の皆さんが知ると同時に、日本中から来てくださる多くの皆さんにも知ってもらうことが大事だと聞いてよかった。今後、そういう観点で教育委員会は外からリードしていくような形で進めていただきたい。

春日区町内会長協議会の研修旅行で、他の城や山城を研修会の一部に組み込んだが、非常によかった。感激したのは一乗谷である。時代は謙信よりも少し前の話だが、あそこは全部発掘して、復元するところは復元し、誰が行っても分かるように、素晴らしく整備されている。ところがそれに比べて春日山は…違いは先生が一番知っていると思うので、教えていただきたい。あそこは県が中心になって発掘と整備をしてきた。残念ながら春日山にはない。県や文化庁にいくと、「上越市は春日山をどうしようと思っているかということが一番課題だと思っている。」と投げかけられる。県や文化庁に上越市に発破を掛けてくれという話をしたが、「発破を掛けるよりも、一緒になってやっていきたいので、皆さんもご協力お願いします。」と言われて帰ってくる。

【小島講師】

後段の部分は現在の行政に関わることなので、私が声を張り上げてということではないので、前段の部分をお答えする。整備の手法の問題だが、日本の史跡を見ると、石の文化と土の文化がある。一乗谷（朝倉）や、群馬県の太田金山城というのがあるが、石山の城なのである。石山の城の場合は、石を切って造っている。有名な竹田城もそうで、屋敷を造るときにまずは石を切り出すのである。切り出した石を春日山のように斜面に積んでいくのだが、積んでいけば、自然と石垣ができる。春日山は三紀層の泥岩とは言いが、春日山の場合は泥岩とは言いながら、砂岩と泥岩の間で風化してしまうので、石垣を備えていない。謙信公の銅像を昭和44年に造ったが、あれも文

化庁に散々叱られたそうだ。石の文化を持ったところは、石を積んでいけば風化はほとんどしないが、春日山の土は風化する。風化をどう抑えるということは植物をどう管理するかということである。

日本の史跡の整備では、石はそのまま使用し、土の場合は覆土して整備する。土の文化劣化してしまうのでそのまま整備はできないのである。それが春日山のわけである。その方法についてどうしたらよいのか、見せ方はあると思う。県と市の関係については、リングを別の会場に移してやっていただきたいと思う。

【藤田委員】

上越市の中で案内したい場所で頭に浮かぶのは、春日山である。そのような大事なところの近くに住まわせていただいて、ありがたい。昨日案内した方は大阪から来た方で、「ここ全体が山城だ」と話をすると、知らない方はかえって感動してくださる。少しは自分の知識で直接お話ししながら、紹介させていただいている。崩れた所のパネルのことを聞いてよかった。

神社の回りに大きな杉の木に、蔓^{かずら}が結構上までなっていて重たそうである。その管理、目に見えている所の雰囲気は、観光地を守るためには大切だと思う。

【小島講師】

管理を誰がするかということもあるが、所有権というのがあるので、所有権と管理するのは微妙に違うと思う。所有している人が必ず全部管理しているわけではないので、地域活動支援事業も使っているようだが、管理等は地元のわかっている人がやったほうが早い場合もあるので、そういったところは考えていけばよいと思う。

ご案内をされたという話だが、「歴史文化基本構想」というものを上越市で作成していて、その中で「地域の方が地域の歴史文化を自分の言葉でお話しできることができる。」ことが、「歴史文化構想」の一番の目標である。我々もいろいろ書いたりするが、結局その方がどういうふうに春日山を想っているか、どれほど愛着を持っているか、それが全てだと思う。色々な方に会わせてみて、その中でパンフレットにある言葉やガイドブックの言葉でなく、ご自身の言葉でお話しになることが、一番のおもてなしだと思うので、是非続けていただきたい。

【吉田会長】

地域活動支援事業を活用して春日山の整備をおこなっているが、春日山の整備には

縛りや法律があるが、どの程度ならば地域活動支援事業で対応できるのか、教えてほしい。

【小島講師】

基本的に土地の改変が伴わなければ、意外と自由である。国の指定地でなおかつ公費を投入して上越市名義にした土地の改変は、ほぼ100パーセントできない。だが、春日山は広いので、民地があったり公有地があるので、越後青芋の会の方が仰っていたように、裏の道を整備することなどはできると思うので、ご相談していただきたい。自称「歩く文化財広報」なので。市役所30年、やめて10年経って同じことをやってきたが、いよいよ時代が変わってきた。ただ、できないことは1つだけ、土地の改変だけである。公有地は土地の改変は絶対できない。公有地でない場合はできるが、やってしまうと取り返しできないので、皆で考えたほうがよいと思う。

【谷委員】

私はどのように山を活用するかはよくわからない。だが、謙信公の銅像が建っているが、あれはどのような経緯で建ったのか。また、公有地なのか。

【小島講師】

あそこは公有地ではない。昔の財団の土地で、今は上越市の土地だが、公費を使って買った土地ではない。昭和44年以前は土地の公有化は一切行っていない。あれを作ったときに、文化庁にいたのが安原さんだが、名刺交換をした際に「お前か。俺に始末書を取られたのは。」と言っていた。当時の市長名で文化庁に一札入っているそうである。作ってはいけないところに作ってしまって、どうしようもなくて、そのまま始末書を取られて、そのまま残っているというのが私の聞いたことである。当時の担当ではないので、詳しいことはわからない。

【谷委員】

建ててはいけないところによくやられたと思った。

【小島講師】

先ほど吉田会長の返答に「やってしまうと取り返しがつかなくなることもある」と言ったが、本当はあそこに銅像は作れないのである。もし作れたとしたら神社の中ならば作れた。

【谷委員】

現実に今、あそこにあるのは取り返しがつかないよりは、むしろ観光に貢献してい

と思う。

【小島講師】

今はそういうふうの良いほうに思おう。私も、そう思う。

【野口係長】

時間になったので、これで研修を終了する。

— 小島講師、関係団体退席 —

【吉田会長】

次に「(3) 自主的審議について」の「①分科会メンバーの役割決定について」に入る。前回までに、分科会の審議内容とメンバーを確認したが、今日は分科会のリーダーと書記を決めていただく。各分科会に分かれて決めるようお願い。

— 分科会に分かれて協議 —

【吉田会長】

決まったリーダーを確認する。

- ・福祉：リーダー（谷委員）、副（佐藤委員）、書記（橋本委員）
- ・観光：リーダー（田沢委員）、副（田中委員）、書記（藤田委員）
- ・安心安全：リーダー（吉田実委員）、副（星野委員）、書記（今井委員）

その他、次回の日程等について事務局に説明を求める。

【野口係長】

- ・次回の日程等について説明

— 日程調整 —

【吉田会長】

- ・次回の協議会：10月20日（金）午後6時30分から 市民プラザ第4会議室
他に何かあるか。

【吉田実委員】

町内会長との情報交換会についてだが、前回の内容を確認して、それを踏まえての話合いが前提として臨むように、提案する。

【吉田会長】

これについては、町内会長協議会に11月上旬ころに行う予定として伝えてあるが、これから調整して連絡がきたら最終決定になる。

- ・会議の閉会を宣言

9 問合せ先

自治・市民環境部 自治・地域振興課 中部まちづくりセンター

TEL : 025-526-1690 (直通)

E-mail : chubu-machi@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。